

# かたの



R6.10月1日号  
形埜小学校  
校長室だより

## 「学芸会」に思うこと

学芸会に向け、各学年で劇の練習が始まっています。どの子も一生懸命。セリフを覚え、少しずつ動きもできるようになってきたところです。私（校長）自身は学芸会大好き人間で、学級担任をしていた頃は自分で劇の脚本を書いたり、合奏のスコアを書いたり、準備の一つ一つが楽しくて仕方がなかった記憶があります。その後、担任を離れ、市教委へ行き、学校現場に戻ったらコロナで学芸会が中断してしまっていたので、久しぶりに生で関わることのできる形埜小学校の学芸会が楽しみでなりません。

ところで、学芸会はいつから始まった行事なのでしょうか？気になったので、学芸会の歴史について調べてみました。

学芸会の起源は江戸時代にまで遡るといわれています。江戸時代の寺子屋では、席書（せきがき）という書道の成果を多くの人に見てもらおう行事があり、子どもたちは晴れ着で参加したそうです。明治になり学制が施行されると、席書を踏襲する形で「教育展覧会」が各学校で行われ、作文や習字・絵の展示や理科の実験会が開かれるようになりました。また、各小学校の代表が試験で競い合う「比較試験」「学業競技会」「奨励試業界」「集合試験」といった行事もあったようです。学校の名誉をかけた一大行事であったようですが、過度な競争の悪影響などにより廃れていき、代わって学習の様子・成果を発表する「学芸会」が広まっていきました。この頃の学芸会は、今日のように文化的な出し物の発表というよりは、普段の学習の延長線上にある、今でいうところの学習発表会に近いものであったようです。

大正に入ると、学芸会で「活人画」や「唱歌劇」も行われるようになり、大正8年には「学校劇」として、演劇が中心となっていきます。昭和に入る頃には、演劇を行う学芸会が、学校・地域の行事として広く認知されるようになりました。大戦末期には戦争の激化に伴いあまり行われなくなりますが、学童集団疎開先でも学校劇が上演されることもあったようです。戦後の学芸会は、教育の民主化に伴い、戦前の愛国的・国家主義的な色合いが消え、演劇や合唱、合奏などを通して子どもの表現力を育む場として重要視されるようになりました。途中、学習指導要領の改訂により、国語科から「演劇」の内容が削除されましたが、学芸会は重要な行事として今日まで続けられています。

教員にとって、学芸会の準備はかなりの時間と力を要する作業です。すべてを勤務時間だけで収めることはなかなか難しく、勤務時間終了後や休日などにも資料や小道具、衣装探しに奔走する教員も多くいます。教職員の長時間労働が話題になる昨今、学芸会そのものを取りやめてしまったり、大幅に縮小したりする学校もあるようですが、私自身は学芸会を大切にしたいと思っています。上でも述べたように、教育の歴史の中で価値付けられ、子どもの成長に大きく資する学校行事、それが学芸会だからです。もちろん、社会情勢にマッチする形に少しずつ変化はさせていきますが、「子どものための」学芸会はぜひ続けていくべきだと考えています。本年度の学芸会当日となる10月26日（土）には、子どもたちと教職員の力を結集した演劇をご覧いただきたいと思っております。よろしくお願いたします。



9月19日 FBC花壇の前で集合写真 PTA会長の野澤さんにドローンで撮っていただきました。



9月19日 1・2年生 ドローン学習の様子



9月24日 5年生 社会見学



9月18日 脱穀



9月25日 キッズデイズも近づき、部活動の練習にも熱が入ります

